陸 八ヶ条
や 一
紋島
や 十八
雑 三ヶ条
や 廿二
二ヶ条
やた 十
ぢや 十三
ちや 十四
ちやた 十四
ちやも 十四
らちや 十四
ちや 十五
やそ 十七
やち 十八
ちや 廿
ぢや 廿四

辭しおの緒

か 五ヶ条
かう 廿七
二ヶ条
ろう 三十
二ヶ条
ろう 三十一
ろう 三十二
何の部 八ヶ条
なに 廿九
なぞ 四十一
なぞ 四十二
たれ 四十三
たが 四十四
いづら 四十五
いつ 四十六
いづ 四十七
いで 四十三
いで 四十四
いづち 四十五

詞瓊綸四之巻

や

○やの結びは。紐鏡の中の段乃限り結辞にて。一の段に出せる三様乃
おなじ。
○そのや何の四つハ結びの辞同じき中に。や何ハ疑ひの辞なるにおのづから
んとそやる事なくして。事なく異なるハおなじかるぞ

○動くねにて結ぶや

古一　たに風にとくるこほりのひまごとにうちいづる波や春の初花

後拾古　いつとなくこゝろそらなるわがこひや富士の高嶺にかゝる白雲

千四　てる月結び緑の床やしらまゆふかづらき山のたに川の水

新九　こぞやさは雪げそらにあるときゝしたつとしらぬ花乃衣

万一　これや山のやまびこふみて八ちかへるきゞすなくなるふせの山

同十六　さき　や　この名ふかふ門のうづしちふ面うちふあぬをあぞと
いせ物語　こま　や　この天のえごろも　えべしこを　えがみ　すしこたてまつりたま

又

金四　そらの雪ハ吉水結葉ちらく　除よりまと　や　小雪山のみを結をびしさ
略志集　みぞもちりくりはる雪を乃そをびのこ　ぬきせぬ　や　まろが身のうさ
こまこ八雪のさびしさ　まろがこのうさをど八　神く　用の言ふを　神ふ　躰の伝
よりひをして　結びくるりのうり

秋十九　いそぐ川　そこく　や　まぐ花ふ秋の夢下はいそ　ひ結れのゆふうが
雪八やのてふをそく　秋とふをへうてて夢半でへハかりびを　その秋をやが
て下へも月をて　秋の夢とつきくるし　されど上旬のをハいそぐ川　そやまぐき
よ秋をくん　秋の夢のをるとふをし　此方の夢三の巻のの結をといへを
まく

千十六　れりひよりゆめべ乃ををたをぐらばこを　や　歌きふたへぬるふりと

秋八　行をを　わが身結をそ　や　後みどりつひよハ世べの歳とおりへで
同十六　えぐり行ひてえく　や　ををををとをるぬまふをぐををは　よをその月新
ちをくをもやの結びを　神ふ言ふをを　をて下へ行ぐけくを

○いひうを　をて　結ぶや

後十六　こを　や　ちのゆくをもうをかをつちる　雪をちをぬもいふ坂のせき
同十七　雑俳　ををふこをみつの浦ごたこを　や　このよ　ちをををる　私
後拾十六　あぢきなく　ひひこをやきつをぐををうり　や　ぬでの山吹乃花
金三　ちをををちるかふいづ　ちり月結ふをとひ　や　いふさら結雪
秋十二　山ぢ川の　麻結をごろをををいくをあをで月月　や　をぐちる雪
同四　秋の夜結月　や　ををのあぬのくく　此方ちかきおきの結り　私

古六 かなしき秋のうらみやなつ山 おもへぬ枝にいつしかつくし

古十 みやこまでもやちりとまらむつの山 夕霧たちしふるさとの下ぞ

古十一 うつせみのなく蝉やよそにありける 恋しき人のうへにやと

拾十九 ゆふしもおくてやつひにやみの夜の ひもいでぬ人のさめぬは

此歌はやみなんといふことにかけたるをかくの詞に下へつきたるはすべての格と異にぞその詞のかかりをも此格なる

○切るるや

徒のうちさきにおくやあり

古十四 まくらする森ぞなくねるをことなべし おのがさむ里のひとさそひや

後四 我おもひねよかと山べの月らしきを木葉がくれに都はきこゆや

後拾十 とひでやとたのひやおぼぶに花のきをいふぞ色が袖をそくちぬや

古十八 うかりけるみのうの浦のうつせ貝 むなしき名のみたつはきてれや

古十二 わしきたなはしそながらへそ枝にちるあのうそ布むすびつぐとや。

古十六 えぬしもおりそぬ八重山ふきぬゆらむとらさぎらひこんとや。

新古十一 いせ集 難波がたみじかき芦のふしのまもあはでこの世をすぐしてよとや

古十九 いせ おもひ川やみのくま山のむろの松 なしはいつとも忘れ侍

拾一 ちる花をなぞまとくえぬぞやいそのかみぬるきうつしむかしを

新十 袖にしも月のきとは数をかくし浅きとぞやこし川の山ごえ

拾十五 春の夜しくしつりとむらいきる八ふかりぬぞうりえでや君

新十三 きくやいかにうその色なるなげきにもまつに音きるならむありとは

此きくやいかには聞しやそれぞといふ格とは異にてきくやとて切れてし心にてちかくしていふきくやといひても同じことそ万葉八よぶるのかしの君乃うつくまれてつそゆりきいふつげきやとかたる結句とは同じことなりもいふとて切て心にてちかくしてつげきやいふといひても同じくしるしてむおひをお照してんなべし

古十　彼の川瀬えきでおぼつかなみぞまさるらむ袖かはくらん。や

後十五　言の葉もり後まねき露をおくらん。や　昔おぼゆる香にほししられぞ

右のおくらんやといふを文字ハおもしろくて言ふといへきまれし

又

後拾十六　かしも本のもとの下葉くさおもふあかぬ初めと。や　うるさる。く

新古　見もとハさぞは雲ふる雲しきえねと。や　立つまた明けぬいつ戸をき

挟衣　あふ坂をなほゆきかへりまどふ人と。や　里のしるしをかたうらむに

件のうたどものごとくあるぞまでとやと切るうたハまれなり。おほくハ切らざるやなり○文字やといひて切ること。文字へあたかれたうたハ見わうれ。
後拾八ハきぬといふぞかうや。拾遺ハきの初めのあまりつ。此にやハ切れぬ
なりやうあれたやとらひてつと結ぶ格あれバいかぞ。これハうた書きぬといふぞう
まやさよしのつきくの歌と合く同じ歌あれバ結ぶをあり出すれんとあてこ
そよくなつてふらんと疑ひをとらひで。とハうちめらむとうきん。又新古そ
六秋の歌をそうひまでてや。久方の月の出にこがらしの風。今夜る夜ら合秋の夜ハ
月えよくてや出月の有明らしさへかはるかな。風雅旧訶をきても人のまよふむ所

さてやおもふてふハなきてふてなけ。ことなりてやといひて切るらん。切てハいかに
きこえ。切ざれバやの結びとなり。されかくによろしきをききとしき
おもしよき疑ひのやに。後のあらぞにおきて下をその結び辞にて結ぶなり。後
のかちがひに也て切るとの二つありて。おのく上より来る言の格をもて定まり
あり。ならびにおくやの上をかなしれバつづく格の辞よりきたりかけ。なぞらへ見るに
おきて切るやの上ハ。必切れて格の辞よりきたるが定まりなり。つづく格の辞とハ紐鏡の中の行の格
あり。切れて格の辞とハ。右の行の格としるす一の書のさだめにくはしくいへるがごとし　さてなかばにおくやの上ハ。つづく辞
よりきたるすハ。大かたもおのづから結るまではなき格なるを。なかなかにお
きて切るやの上を必切れて辞よりきたるすハ。古人もおのづからよくこ
きまへて。一つも誤ることなかりしを。後世の人そこともしらねバこと誤りて。
つづく格の辞よりきたることおほし。その例を一つ二つ出してさとさんそ

で。あるやなしやといふが定まりて。あるやなきやとハいえども引ハ
如も後の右のりて切る辞。あるがきハ中ゆりて俗ぐく辞し。形容接ナセ引とめるバ
つゝきんもけるやとそもあつそのまゝふあるん。ことゞもでこし引るやとてとゝべき
接し風雅古ことば
ゆあやまりけり　又ありきやなりきやとやゝこにきやといふが定まりふて。
引りしやありしやなぐくハいえども。又えんどやきりどやゐどやこにどや
といふがさぐまりて。えぬやきぬやなぐくハいえども。又えゐやゆゐやゝ
いふが定まりて。えゆるやゆるやゐどくハいえども。たいづともこゐ先後の右ゆと中ゆとを以
てゐきまへ　ゐべくゐ　ゐべくゐ俗のそゞめにて切るやの上をみゐたの接とんゆ俗ゝ。
さて又俗のゐゞにおくやの上をけるやゐゝきなきやゝゐゝきゐどやう
ふつゞく辞ゝりあるゝすし。俗とこゐとふゐどくへてんゆべゝ。ことハやゝ
どいづとのてふをはあと皆。俗ぐく辞ゝりあるゝこの定まりハまるすし。
古人の俗をゝくゐなてみゞりにゐどゝべゝ。ゐゝにゐまかのづくゝよくゐにまて俗ゝふも

古一　引十　引十九

うぐひすの差りゆるてふ。そのゐ折てかぐくん老かくるやゝ。
花の井めふけくやとて。ふゆきぐんぞうとふちりぬべくゐる
ありぬやとゝ。ちゐろゐぐそくけひゐくゐバたくぶきまぐぞゐき
こまくハやとけくるをとゝあて下へできくゝし
まゝ

接八

家のいのちをくゝとふハけくびゐをゐえでやとゝ。ゐぐかゐくけりきる

引十九

人ちまぐいまやいまやとちゐやぬる神さぶるまぐゐをくそまて
こまくハ突ゝを切くやゐハゐくび。俗のゐゞにふかくやゐくを下の言をゐぶきて
ゐをゐくゐて。やゐて切てゐくゐし。接きるハゐとゐえでやちゐんとやふ
ぐるハけりやゐる今やゐるとゐるを。死うんといふゐをちぶきて。ゐくゐ俗ゐ
きて。ゐくゐくゐをふくゐ。引古人
ゐるとゐをとゐそまてくいふゐ俗ちぶ
ゐくゐをゐくゐし

○やを言葉の掛詞

古一　年ゆくとふまちハまふ月一日せをこそ〳〵やいそんこう〳〵とやいそん

月十六　美あづふあつりかく　故ゆくは　春やいを待ぬ人やとそ

新八　ゆとをが〳〵芳ゆ古〳〵ん　つう邦かく〳〵やう〳〵　美

源氏夕顔　あつ花をといふ　ふりてうなぐさ　ん　つるやきぐさ

古二　秋やくく　きそやまぢて　はそ〳〵きを　萩やどを〳〵　もとがそふな〳〵

月十三　名やこう　れやけきん　たとを〳〵ど　美くう　つう　萩てうち　名てう

月十六　月やけう　ぬをやし　ゆを〳〵　ぬ　春　ぬ　八　の　ず　う〳〵て

風　一名を　花や　雪かを〳〵　やけり　ゆし　ぬ　ふ　ど　ゆ　を　ね　ふ　ま　る　を

古八　えぞを〳〵　ぬや　う　ろ　え　よ　命　ば　し　ば　春　や　を　を　人　や　を　を　ぬ　を

月一　を　や　き　花　や　あ　を　き　と　き　を　を　ん　を　を　ど　も　を　う　る

源十三　ち　ど　や　あ　ん　き　や　せ　ん　と　の　を　川　春　ゆ　ま　り　の　ん　を　お　り　ひ　や　ら　な　ん

古七　を　や　こ　ん　春　や　ゆ　ん　の　り　さ　よ　ひ　ふ　を　を　ん　ば　ば　ど　も　さ　び　春　ふ　を

ちの方ハ　ふなば　ふあ〳〵　やの　を　ゆ　し

又切〳〵　やの　を　ゆ　ハ

新十七　ち　の　川　か　ら　ふ　う　き　く　を　ん　ん　春　ゆ　春　ゆ　ち　ら　び　や

千古　と　す　ま　ぬ　や　を　の　ぶ　や　ふ　ふ　の　を　ぬ　ま　ゆ　春　を　と　笑　あ　を　ど　と　の　を

新十三　夕　を　ら　ん　命　か　け　ら　う　ぞ　ら　ふ　の　あ　を　や　ら　び　や　ら　び　や　ら　ふ　も　を　か　ま

千十二　し　ぬ　の　を　と　や　い　ま　と　や　い　ふ　い　ふ　い　ま　春　乃　を　ど　と　を　し　春　も　へ　ふ　り　を

古九　ま　あ　〳〵　ま　ど　ら　ど　ら　を　ん　み　や　こ　る　を　ど　ら　ふ　人　を　ら　り　や　を　や　こ

又

○玉の手日

万四　かくしてやなほやまからん近からぬ道のあひだをなづみまゐきて

同七　かくしてやなほや老なんみ雪ふる大荒木野のしのならなくに

これらハなほぞにおくやなるが。なほをかさねて。二ツのやをしるしつ。一つにむすびたり。古き集よりこなたにハ此格なし　又

千十七　こぎやゆかんいづちとまらんそられさへ思ひさだめぬべきこの部

これハやとかゝる字よりみゆべし

○や何と続く格

後十三　あふまでとゆかしねどぬるゝ衣手乃かく涙思ひにかゝるやなぞ

同十九　忘れなで思ふの里へゆく人を會津の山にちるらきやなぞ

拾十四　玉川にさらす手づくりさら〳〵に昔の人乃こひしきやなぞ

新四　萩が花まそでにかけて高円の尾上乃宮にひれふるやたれ

赤染衛門集　浪まくら夢にまかせて行舟の帆かぜにみゆるかぢとりやたれ

古一　春がすみたてるやいづこみよしのゝ吉野の山に雪はふりつゝ

同十七　ぬしやたれとへどしら玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はん

同　玉だれのこがめやいづらこよろぎの磯乃浪わけおきに出にけり

玉三 定家　霧わけん秋はあらしをまちかねてみやこやいくへまつかやまに
まで

後三　うちはへて春はさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらん

同　春ごとにながるゝ宿の菊ならば花のあるじやいくよなるらん

後拾九　たびねするみやこの空やいかならんさよひあかしの月をみるかと

新十三　おきそふる露やいかなる露ならん今はきえねと思ふわが身を

又

摂門 みるがゝふちゝとうけぞ君代乃松 や □□ ぬきうえ結びおきぬん □

ことハかゝをちをりをづし

又

拾遺 きゝ川春おいのる や ふのよ向ていそぐ生田のりをおほせよ

ことハいのるやふのたむきぞと切ゝをちをやそ下へつきそうめづし

をる

後二十 をがらゝ〻かゝ や いづとぞ きゝゝやらのぬゝ〻ちき宿ゝとろぞうぐき

新十一 みるをかるかゝ や いづゝぞ きをさゝて恋ふきゝよたるおちつり松

新拾遺 ゆきゆゝるゝろ や ちゝぞ 松のせおちをハふ年もたりゝゝやふき

ちゝハそを帰ゝ

又

後十一 なゝゝゝ川ゝゝゝゝ恋えとたるりのをちゝふゝゝりの島 や なふちをと

仏教を説おかゝ。二の巻後拾の終り出ぞう考へんべ

又

新十三 きゝ や いふ ゝをおををる風ふをもまゝふ者ちをるゝ人をゝ

ことハ切ゝやゝて別し。上の切ゝやの像ゝ出ぞを

○なゝどや ちゝぞや

風十 隆信朝臣 ゝをゝゝはちゝるべゝ和ちゝ者風おたゝゆゝくへゝをもゝゝ や ふきこぬ。

千十二 ゝゝど や かゝゝさゝと雲ゝゝゝ花ゝ わゝ まゝ ことハをゝとゝゝゝゝや

六帖 おいぬゝてなゝど や ゝゝをゝ ゝゝを をせをぎきん おいどばゝふふふはゝ把の

後十 ちゝゝゝをちゝぞ や 恋ゝのきゝゝかゝん 苦おを 毒ゝ人ゝゝかゝゝん

拾十七 琴おちをはちゝぞ や ゝひちゝ。ゝゝゝゝのおゝぬふを引ゝゝめゝバ

後八 後葉生ゝゝゝゝをおく恋おをきくふかをゝ人のちゝぞ や ゝゝき。

後拾十一 伝西行

あぞや かく思べしとは花だにきいまる世べりはるはいづくん
山家、あぞやとて切くし。下へはぐそへてふをそのそべ

大くに何号は下ハ三る。かとあるる例ありふ。たのごく などとあぞとの
二つの。やとあるる例あり。その中にあぞハかとあるゞあるくして。やと
あるくハとあるく。なぞハやとある例のとして。かとあるとこし。
○あぞやいくるまや あぞハ別ふ下のきやの係と出せり

○やとはさのや

古六 うゑしとは花まちどをふ有し菓をつゝふ秋ふ行ちん。や人ん。
同十一 秋乃田はかのゝへをてゝいるつる秋光のまゝとゝる。や。ゝすゝ。
同十六 ちゝをぞゝりあきはとふりしなるえぬ。ゝ。や。ゝ。かゝべき。

後八 りみぢ葉色ハ色も秋はしまもふきてゆゝん人をふり。や。そめぬ。
同十 難波がくゝかりつゝも芦のうゝつゞはぎとへも考をゝる。や。へゞつ。
古一 見てのゝ。や。人ゝかゝん。山ぢゝるゝおゝて家づとふせん
古をみるなかぞふおくや。山下ハゝる切てやゝり
古一 ゝゝこだにハ日八者ゝそぬりをまゝきえぬハゝり生花と見ゝ。や。
同十六 ゝゝて秋をゝゝてふくゝ花係ざゝばゝつゝふてゝとをかゝま。や。
後拾九 ちゝざゝばさゝ秋人のをゝゝま。や。横のゝゝハちゝゝゝり花
後拾三 小倉近 きゝま。や。山ぢゝゝぎとゝとゝもまゝとゝれむる人をかりせん
をべてまゝ。やゝゝふゝきのや。ゝるやゝのゝゝ
後二十 りゝゝとふおきぬゝ秋のあぞりかゝらん。ゝおりひゝけき。や。

新八 淡茅ハ[illegible]をれくおきー草枕上の空を飛見。とれりひろきや

栄ひ 衣の玉 いそ〳〵へおりひろけきや[illegible]ろ[illegible]かり〳〵かくきんぬ。」のろ枕衣を

拾三 かりかとそくべろ[illegible]や[illegible]秋の地枕[illegible]ろ徳ケ〳〵日も暮ぬべー

新十七 ちぎりきや[illegible]あねとろれよ[illegible]おきー[illegible]つきばりかさんきとハ。

古十八 おりひきや[illegible]ゑなきとかとにおろへく海士の縄[illegible]ろりせんとハ。

後十 れりむきや[illegible]ぬ[illegible]ゑぬ[illegible]ゑ[illegible]ろかぞふだろ[illegible]ろんりのとハ。

古十八 ろすとてハ美ろ[illegible]ぞ[illegible]ふかりひきや[illegible]書ゆ[illegible]ろて[illegible]ゑをえんとハ。

後二十 春枕乗乃美のろちぬもおりひきや[illegible]ゑなき[illegible]ゑをゆきてえんとハ。

きべて[illegible]ひきやのやハ[illegible]やそのこと。[illegible]ひきやといへ[illegible]かるーば[illegible]ゑと話

ぶか[illegible]ハなきろすとも[illegible]かくふー。ぞろくのこもひをろ

第拾 衣の玉 ふりひきや[illegible]ぶのろをほどとるくぬろ[illegible]まして後かあんと。

後十六 こ[illegible]ハぶとと[illegible]ぶ[illegible]ろ[illegible]

又[illegible]を上ろーおろ[illegible]ろを[illegible]

千十五 ろ[illegible]人をふべーと。ハたりひきや[illegible]とがろろさへなどかろろーん

又上ろとのこ[illegible]ろもあり

新十 身たきて又ちゐべーと。ふりひきや[illegible]命ろり[illegible]佐東の中山

又上ろろいひて下ろを又[illegible]といてこもこ。ハいゐぬぞや[illegible]

後十七 かけてぐふろぐ[illegible]ろへと。ろひきや[illegible]ろん身ろの花を見ーと。ハ

きべ〳〵[illegible]ひきやハ[illegible]ー方をいひ。きハ[illegible]ろ[illegible]ぞよハ今のろをいひ

て。こ[illegible]ろ[illegible]。一つ[illegible]ろ[illegible]ハ語し。末の撰集の中にも。ろ

ひきやとわるべきぞと。ぞよとよろろ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]ぞ[illegible]。

○やえ

古一　春ぬ乃ハ山ハ乃やえ〳〵ハ花ぞ秋乃ハ山ハ乃ぬ

同二　吹風をなきてくるしき春よりぞ花ハ盛やえ花ぞ秋ぞ

同八　ゆるすとぬ思てそぐ色よきりぐを秋のあをハ指くやえ乃ぬ

同十六　かゝるもをなをもバオにてまつをめかをてのをやえ恋んと思ひ

同十八　野とゆゝバゝづゝと思ふ人ゝをふぶやえ恋をこゞゝん

同十四　そゝひをき湖やえさゝぐ山川乃後き流れてもあゞ波ハゝめて

同十云　時〳〵色乃を秋やえ人のあゝべき。わゝ波ゝるゞぶこひきりのを

同　ゆゝるがゝちふゝるまのをやえ美といん。えゝ和き世をもゝつとをえんぞ

後拾十一　かくとゞぶえやえいゝふきおゝうゝと苔〳〵ちゝもちゞゝりゆゝる思ひを

全八　はのゝ思ひまゝろやえ人をゝのく〳〵川。恋てを流〳〵き流れく八ゝてゝ

はのゝ八戸のまゝ色のゝをを恋やえをゝ思ふひゝをゝゝ
やえ二つゝるゝ

古和歌　いゝく〳〵ゝ思ふ吹風ゝ〳〵やえあびくべき。世ゝ分ゝを〳〵ゝ思ふやえ乃ゝぬ。

花の家ハゝゝ中におくやえ。
ことゝより下ゝるハみゝるゝ切ゝ　やえゝ。結びやゝはゞ。

古二　ちゝる花のゝくゝゝ思ゝるゝ和なゝゝば恋ゝゝゞひをゝふゝゝ思ゝまゝ　やえ

同十四　いをのかゝを寄ゝる時井をゝゝゝ〳〵ゝ　みゞゞバ恋ゝゝと思をます　やえ

同八　かゞゝりなきをゝ思ゝよゝ和ゝふをゝゝゝ人をゝゝゝふゝゝゝん　やえ

同十九　思ひきん人をゝゞゝゝとゝゝ思ゝゝをゝ　やゝ　やえ

後四　思ゝい〳〵ゞこゝゝゝゝゝきも和まれゞやまを思ゞこゝゝるよゝ　やえ

新十五　数ゝゝゝばゝく和ます　やえ　よの井にいとかゝゝきハちゞのをゞまに

同四　老へくやは思ひいりてもいかでせんむぐらの宿の秋のゆふぐれ

此歌のやはハめづらしきつゞけなり。下へつゞくやうなれど、ここにてハてふをそへてのもじ。切てきくべきやはなり

千十四　人ぞてハよしもやはとも思ふらんえせぬや君になりすぐるを

これハやはと切れたるをとく見てづけより。○後撰十七　家居ハかもわびぬやは此やはハんなだ歌ものやはなき流るまやとよといふまじきなり

又一格

古一　はるがすみたつをみすてゝゆく雁ハ花なき里にすみやならへるやはせぬ。

同三　ほとゝぎす鳴もなかずもかへるへやはせぬ。

新十五　たのめぬに君がこんといふ夜しもやはせぬ。

いせ集　秋の夜ハ月をみつゝもおもひでにやはせぬ。

源氏　うちつけにかくもむかしのおもかげをやはせぬ。

同若のうた　家宿の若乃いろこきたなうれ秋に霜やはせぬ。言葉のなごり縁

注十一　道しらでやはしなぬ。逢坂乃関のあなたハみえといふなし

件の歌ともにのやはハ一つの格にて。逢坂の峯みえぬぐらく思ふなし。古今の行にやはせぬハ。何とてわかれぬなるぞ。行ともよかしといふ言ぞ。こゝにてへやはせぬぞ。何とて心へぬてぞしなぬもやはやハせぬといふも同じ心の辞なり。後撰なるやはや

○やの下ぬやは

古十九　おく露もかゝらぬ柳桜乃色をやは人のみてきつらん。

古十八　よの中ハむかしよりやはうかりけん。家君と川のさめにまかせつ

拾十一　よそにのミ見てやはこひん。かゝるなみ赤つむ堤乃ゆゑにぞさば

同十三　かづらきや家やは久米の橋つくり。あきゆく雅に猶まてそなりん

後撰十三　なかなかやは又もいふべきつかならん。なくよりもの名ぐさめぞなき

後拾十九

あはこそなかばよかくやはあり
切れしやはハ

忘られぬ人の中には忘れぬをまつらん人乃中にまつやは

まへくやはハ。やにはを添るのにて。本ハぞやとのといふと

同じこと。爰に古へハより来るまでにやはやはを添りしていへり。こそといふもこなるハ

といふも同じ
きがおとし　然れども後世にありてハやハぞ疑ひの辞。やはハ

のうらへつる辞にて。別なるがぬく今はれるに。今も忘がくこれ

をおちて。やは然るやのことハいへり。

万葉にハやもを添てやもといへるにかりし。こゝもうたやのこころもやはのこと全を
延りてよあり。万葉にやはといへるをハまさしく見しぞ。九の巻に人川ゆきあひ
よそにやはみくあるのなくも。八の巻にあるをも。やは見んとあるハ文字の
たやまりなるべし。

〇ばや

古四　天の川紅葉を橋にわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ。

月十二　久方の月のかつらも秋はなほ紅葉すればやてりまさるらん。

後九　夕さればほたるよりけにもゆれども光見ねばや人のつれなき。

古十二　塩みてる海ときけばやよるべくもなみのふるめなしてみのへぬらん。

思ひつゝぬればや人の見えつらん夢としりせばさめざらましを

此のばやもぬるばやハとあるを略にやといふこころ
まて

千十三　うきながら忘れし袖もくちはてぬればや人にみえまじきかな。

万十一　あらたしもおもひならんとりかへてきけばや君が面わすれたるらん。

六帖　いせ物語
秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜しねばやあく時のあらん。

古一
心あてにしをらぞやをらん。』初霜のおきまどはせる白菊の花。

後撰三 公忠朝臣
さくらもちるへぞ枝にわかれてちる花いつぞやちらん』たのむところか

下内侍 集
ほのかにもえぞやあぐさむと思ひしに心をさらねならりけり

右のぬくなるぞやハやりし語下の語の切字ふへうつして加ふ之てえれバよく聞ゆ心わるぞや人ハ見もえきべきハわるバ人ハ見もえきべきかし。さぞやや見り西王をらまじうらんハきみぞ君が西王すまじうらんかし。八子乗し孫ぞや行く時のわうんぞ八子乗し孫ぞわく君きのわうんかし。をらぞやをらんハをらでをらんかしといやをらんハ何ぞやをらんかし。見ぞや あぐさむハ見ぞあぐさむかし皆かくのごとく合せてをきかしらぬ○初古今六西行いかで見べき君ハ行ぞやえよくもきてあろうの君やとさうに思ふん。花ハ君ふ行バといひてやえハわりきなどいふやうの歌合の辞之されど此辞ハ今ハ例なし。故よからん。西行君ハ此などもなり。又新古今哉一袖をきてをらぞやをらん見れとこかたちをむく来ふあり梅がえことハ右ふしる古今集の言をとりしく心ぞて得るし。此をうてハ折らぞやとのをきてよろしきふ。下の折らんといふ詞あまり。又新後拾遺九いけしへも今もわらぞや見がごとく思ひつきせぬまうれたる人。こまハ見ぞや見ぞやと写しけやまあるるなるべし

○右の外ふ新古今のぞや行り。下の雑六の部ふ出せり

○見や　見やえ　見やも　ら見や

きぶく見ハんのわうしかる辞なり。見やハんやえのこころいづきも

まあらしくへうてるる所ふ用ゆ。

古又
うゑしうゑバ秋なき時やはかずらん花こそちらめ根さへうきめや

同十三
まあれそしおく袖露乃よ紙をきとこ六つくるも色ふいでめや

同十二
秋なきばむしむまで鳴声してれおそうめや 独ある乗を

同十又
こめやとは思ふりのかうむらうし時鳴く久ぞとはしらまされつ

拾一
益そむる花を見をてて加つらめや おおつらうへと妹をまち川雲

新三
まちれめや行ふむを京に引むすびるちる時雲への家の行きぶの

古十一
たのめしわまバ宗ますも枯そおひよ名をこひをしさひバ行ハざらめやえ

○むの下巴

○十四

月古　みよしの山の白雪ふりにけり　めやな

後十二　ゆふそへうつる白ぎく　めやな　と云へるもしぬへぬる人のこころありきを

古　玄滅　山しなれの吉野の里にたのもしだふ人のあるなくはひ　めやも

後古十二　玄東で　あぶ波の立ちの白雪ふりにけり　めやも

後一　今はしに常盤の　めやな　うげろふ　ふりにけるあるは日と　ぬるしあを

めやをハ第ういたたちめやもと日とし万葉ハめやもといつるを

古十二　はの白雪ふりにけるはのつしれ色もなるふるがきはが色人ふる　らめや

後十八　あしひきの山下ろしみなくるとしがとしえぞ　ぬかりる　らめや

後拾十二　ちら　らめや　ゆ　ちらやハらんやそのまちり

○きや　みらさ

古四　秋の野におくしらつゆハ玉なら　きや　ぬきつらぬる物乃いろとちり

月　星ハあまそ人をなりにしをなどな　きや　をもまが紀も秋のみちつるる

月十　くべきわどうれとぎぬ　きや　ぬらびて明ちる物ぬ人をうよむる

月十一　いせの海うけをもる海人のくるな　きや　ん山とんを定をかのつ

月　うれ第乃うへをわぎもる関な　きや　ぬきうろを立る人乃なき

月十二　はが色をみ山ぶ白ぎぬ　きや　ちぶさまれぬ立る人のなき

月十六　ちの白ま地やき衣のをさをあ〜まどろふ白　きや　ぬ立ぶさぬ

月十七　咲そめ〜ぬより後ちうちをへう〜　きや　ぬのつのうる

月十八　あぬおもにあるさ月のうれまのうれすあ　きや　袖を濡てこぬ

後文 ゑびすこしまの ちうきを きや 明つるをへぬ入日ちもうん

同八 天の川 をはこゝりにうぢこぬ きや 岩ねにまうちぶとせぬ

同十七 ちこうきのきやぢる岩ぬ小まり 京枝ちげ きや 月ぬ先えぬ

千十一 おぞつうをうふ海のしまぬ人ぬ きや 日ゲうの紫波ちうどぢれある

右の きやハ岩きぞふやとゝふきこ。紗うにこのふを暑きてきぞやといつる例そ。外ぬも
つよふふのきを。又そのをを暑きてきやといつる例こ。岩茶ハ外にもつよにあり。
ゆきぞやをゆきやといひ返へやを思へやといつてゝぬぞもし。さて此きやハ詰切きぞ
下へつきて。とぢをハ岩やの結びまり。

右十九 せぞゝ多 ちきれぞ世べふまづさゝえきどありぬもひまひ海ふ品ぬのゝべき波のふぬ きや

同十一 やふふちもこふゝもこ波ちんりぬな きや ゆふてもたぬゝちゝる下えも

休民 ちれゝゝゝ海ちのちゝもに波ちゝな きや うきゝる海ふぬゝゝ日が神
さゝゝ

右の きやハ岩ゝやをとゝいふきそ。花のふ。きやハ。花のふありやを品ぬのゝべき波の
ぬる八行ゝ波ゝやゝに。きのゝゝ人ゝるゝちふ。岩ゝふなどゝゝへてさゝゝべし。

右 上三 風ふきぞ波ゝ川岩ぬまり ぬ きや 拍ふ行ゝ岩てなきぬべらぬ岩

後十二 ゝつゝふもこ行ゝぬちゝもハゆめな きや えそもえゝるきぬをなり人ぞ

同十五 えゝるぬ きや えそぞまがべつる月新をゝふやいゝん那日ゝやいゝん

接云 わゝきぢは意ゝ波人乃ゆゝを きや やぞのゝそえまゝ比ゝを

後接十一 みゝゝを波ゝるまだふをき浦ぬ きや 毎ふぬを波ぬもえゝぬを

同十五 川ゝみやゝ行ゝ畑乃他のゝ波ぬをゝゝ波ゝるあ きや ゝる人ぬをゝ

金九 世中はゝ波ぬ月にをつゝうげな きや 号ひをつきどえぬれざゝ波ゝ

汐七 新えゝぬ意ゝを行ゝ乗波月な きや 出ても人ゝ ちゝきざゝ波ゝ

同 ぞが意ゝをゝ野波ゝ乃奥な きや なりひいきを行ふ人ぬをゝ

比接の きや 岩葉ゝハ猫ゝ。七の岩古風。波ゝ。出せり。さて此きやハ詰切
接えそ。下のぞぢぬハやよかゝゝべ。

旧 むかしハふじ神を清見が関なれや〓ふぢうも波もたゝぬ日ぞなき
千十七 鳴くれて上紙のかゝるべきみちなれや〓岩さへ若き衣きる〓御室
新十 あきばえおのがきやう峰なれや〓そ此月の未ほとゝぎす
旧十又 やまかげるむらりにあまる鶴なれや〓いもじ川ぞの秋乃よの月
新撰二 花なれや〓千山のおぼろ秋むらさき行しふかき峯のふもとを
菱方下 ヨシ君をばむら川桜木にかくれや〓ちぢ瀬まも行つらひさし
六帖 行ぞ人の立つろも京の神なれや〓雲のふのともありさまる哉
右のなれやハ皆〓なれやと読むべし。さて皆切るゝやまで。さだめハやの結びよかりけれ。さて右の四つまで〓ゑやのことなるとまがひて皆ゆるがかれなきもぞきやのことなる。そ下へつきて必やの結びそろぢむる也。此〓なやのことなるハ切まで。下ハやの結びり行る流ことをみてなるつべし。又集十にかくし此の大文人でいまあまとや梅を〓
おもてうくにつゞつることまハいくまなきバ〓のこまで切まさる本ふ〓ありやの結び
あり続きを朗詠集文新古今集ハ下句をさしつゝかざりしてみふもくらしつ改めて入

右十七 〓あがるる霞に引て出しせる布なれや〓よ紙へうく見飛ぞうる人もなき〓
らまうりば此時をいふ〓なかりけりやうつるまもそやさそ切ることぞ〓ありや又かゝそらど。ことなるも皆ぢ見の辞まで、かつぎし〓よくせぞバまくひきん
旧十八 行きふ名をあらわれいで上の宿なれや〓むらきん人の音づれもせぬ〓
拾十六 霜くまば鶯の立つ糸いりなれや〓むらさき友猶法に入めらん〓
千又 さ〓しる秋法あらふ都もいつなれや〓ゆふ府へハふて出るの〓かるらん〓
新撰又 ちろしるも川むでき八月のあふなれや〓さらえゆくまにぞそのかきらん〓
右のなれやを皆。上よるるがいく〓何まぞりふ朝をおきて。下まその結びそろぢ見
よる中ろふ行りや〓のぞをむにへて又きバんけぞまし
後十九 草まくらゆふてざりは京ふなれや〓露も涙をおきうつり法く
後撰十二 猿も秋くちうるころを京ふなれや〓ちるぞいふてきま入へ帰しつ
新八 神や月ちぐるくてうといつなれや〓立ふるとふし秋乃みや人

日十七 山のはにをしまぬ人はいかなれや をしまれている月もいるよに

右のなれやハ是。上に何などいふ詞有てやそと切るゝ也。なれやハ下ハ何やの結び
かゝりたれ。さて此なるなれやハなるなるぞといふなれやハいかなるぞといふ意也。

右みなさ此なれや皆同じ辞の格ゆゑ。是ハおのく異也。よくせざれバまが
ひぬべし。又切るゝと切れざるとによりて。或はやを添ると見ざ
るもあり。是よくわきまふべし。

○右の外にある歎息のやとくさぐのなれや何れ下に出せり

○やぞ

後九 えられて同じ心なる人しなし我おもふがごとハおもふらん やぞ

此歌の第四句伝明家集は八やそとあり
中務集には後撰と同じくやぞとあり

拾三 年にありて一夜妹に逢ふ彦星も我にまさりて思ふらん やぞ

蜻蛉日記 世中はなにかとかくみなげきわたるらん山のしなぎくらん やぞ

同 宿見ればよもぎが門もさしながらあるべきものとおもひけん やぞ

兼盛集 浮あらしおいやる龍を見るなかの鳴雷のふきゐるらん やぞ

好忠集 夜ぎぬ乃有しながらも今は我夜をせなし絶なバきえかへるらん やぞ

同 よは中々しらるゝいさゝかなる時も何ゆへあらん やぞ 思ふまじバこそ

此やぞといふなれば。萬葉右などにも見えしぞ。又後拾遺よりこなたの集には
とをべく見えし従。後世にはよくも行はれぬ辞なり。

○やといひてらんと結ぶ格

後十九 もみぢ葉をぬさとたむけてちらしつゝ秋とともにや ゆかんとすらん

此例の歌なほ下に云のらんの部にあまた出せり

○やらん

千五百番
谷がくれ木葉が下にかよふ水こそ[やらん]おとづれもせぬ。

丈本慈鎮
春の初めしぬごとふりけてゆく志づのうづまく[やらん]物あはれなる。
すべてやらんといふはいやしき辞なれ。なれども文にもよく八りしぞ。今の
世の人これをよみ詞にもちゐるもおほかれど。古の歌書の歌にもむなにを
さがしく難ぜられけり。

それよりこれまでの條々ハみな疑ひ乃やなり□

○歎息（なげき）のや□

なげきとハ。後世にいふ嘆かしむるにのたまふなれど。
なにあらめ。されどしきにもおもしろきにもたのもしきにもあるなりけるにかは
なれて。すべて人の深く感ぜらるゝ時に。おもく息をはくなるらし。此やなどは
その歎息の声なるなり。今かりに歎息のやといひてあるなり。

古十一
たのしかりし時さゞなみ入江乃志ら波のさゞ[や]人をかくらひんとハ

日十九
ゆへてもおりてぞこのいふなればいかな[や]あやしたのあはれあし

後十八
よの中はいかに[や]いかに風の音を聞くにも今ハ物やかなしき

拾玄
たゞしむと思かくし[や]とられ心なるなどそのにもえやハなむ

後拾十六
絲ぬなはの絲ぬ名にいくく立ぬるぞあはれ大淀のいなむし[や]よに

全八
なにしきく高師の濱乃あだ波をかけじ[や]袖のぬれもこそすれ

新二
うらみぞ[や]うきよの中のいとひつゝなほ風にふさバとぞひらるるをバ

日三
きみがくて絲なまし物を浮てきれ井くなり[や]よハ乃一聲

日八
たのみなる わが身ゆをぞ[や]濱みどりつひみハ世への露とおりへぞ

日十
人をなれくしみつべし[や]おもるたのむやくぶにも心ふをきゝつるバ

古廿
かひが根を絲くらしむこし吹風を人にもがと[や]言つてやらん。□

万五　いかなるしづのをだまきくりかへしむかしをこふるたねとなるらん

金七　ゆくすゑはいとどかなしきしらかはのせをはやみをもぐれや人をこふらん

狭衣　あくがるる海士のもしほぐれや　ふるさつ海の底乃玉藻もかつきこそすべく

後十五　さゝ川のゐるれのいくえまろかれどみぐるに人をよせぢ相をや

件の歌のやうに歌息ぢやうそこ除きてもそこハ同じ古と

なれをぢりしてその情深くなるし。或ハよ或ハおそぶ恋ひ。

くるくるふことをも恋ふ。右の分古今二おきや。同三やよやまて。後

拾遺三いそげやさるへ。同雲三そくや秋風。おどのや。文いでやいくや

よゝやの歌。文なれーやおとりやひをーやいくまーや名づ

らゝやなれーやうめゝやくゝーやおどの歌のやもみる同じ。

後拾十二　いふせんあるこやふくの春ぢ月や　よはの年ぢたのかゝまゝクバ

金八　花ゝゝゝこやゆるゝ人のおりきるあるゝゝゝゝゝのえゝおろゝ　や

千三　五月雨ゝゝゝこやゆるゝ人のおりきるあるゝゝゝゝゝのえゝおろゝ　や

云帖　むぐらとぢ人ねぢゝゝかゝれゝゝあるゝゝゝゝゝゝ人のこゝろ　や

山ゐハ中にのゝぢゝゝ又ゝゝゝゝゝゝ

同十六　おのが波ゝ月ゞ未禁を志をれ雪ゝ菊ゝ田ゝの恨めしの月や

同十　ふしわびぬ志のくゝ小篠ゝ枯ゝ草ゝ侘ゝ人ゝ一夜ばかりに
こがらしハあるといふに。くゞのとのゝらゝやと弦づ。但しのを二つゝくみ
ゝゝがおゝきし

○たゝや　けたハたのゝくよむゝ

拾六　志がらもむ玉ぜのちぞ志乃ゆくゝかゝるゝまぞふろうえしたゝや

六ろ友　秋川しゝみ月きゝあゝし せゞきとめハナゝものをもかゞまさ決たゝや
既略

けたゝやをいとゝ古き錆。そゝ。ちゝゝ記日本紀ゝ 倭建命の歌詞ゝ「ゝゝゝ」
とゝろし。ゝゝ外ゝをこゝゝゝれゝゝゝ。ゝゝゝゝピの雲ゝ乱ゝ紛ゝ出せり。又源氏物語ゝゝの
文ゝゝゝおほしゝゝゝを者せゝゝと紛せるハゝゝゝゝゝゝゝゝ。

○きゝや

後十六　世中はゝ紅ゝのゝ色きゝや人ゝゝゝふゝとゝかゝく水もきゝゝんゞゝ紅

同九　ゝゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝよハゝゝ月ゝゝ月ゝゝきゝゝゝゝゝゝゝゝ

後たち云
新志マ

羊ろうそくとびてハおりふたまさにうふ人あ[きや]又やさもうと
これ〳〵のあきやハ[ひ]ときと新ふうふ。欲島のやを[ほ]るにてあきぐさを[ほ]るう
月じ。[ひ]ときやう万祭ときとえ少。七の色古風新ふ出きと

対馬文
後京極

ひとり孫社ようもむにるわら月えきバ時〳〵もあ[きや]衣〳〵新

播川
後ろそ

時〳〵もあ[きや]みるぐちをを新ゆきバ古のもかのもにかとづ明ありう
ふ〳〵ハ時〳〵もひきと考ひつふうふ。欲島のやを[ほ]るう。播川後ろその
ハやりじるくて個べよろしき成いうるれバうづ〳〵く[ほ]うきん。いくん拾これを
文本系ハ時きひきやとき。これもろ〳〵○播川ろそにこ〳〵ろこそんをころ
を新きやにハぬ人を伺ひきん。ハこその結びよ新れとの下へやを[ほ]う。
ろ〳〵のう産ぬ。

きべてきやあきやるどいうきやハ。新ひのやるうとくさぐ〳〵
て。上ふ[ひ]るう〳〵るがめ〳〵。又欲島のやるもたのおく〳〵猛〳〵ひりふと
まぎきやき〳〵。おの〳〵きあけきをよく味ひてうにきふべきし。

○ぞや
三のきしその結ふ〳〵おとり

○かや
日の書かの結ふ出せる

こきさでの條〳〵ハみる欲島のやるり いづきとと下け結びきやふ
〳〵るこちり

●雑のや

○一つのや

きぐり〳〵[や]伏えの星　太系[や]を〳〵れ結山　かづ〳〵き[や]言宮け山
ひ〳〵志る[や]映きて山　さ〳〵なる[や]志ぐの浦
これ〳〵のさぐひも。地名をまあり。ふ明よ。中におく[や]そ。のこ〳〵ふ出つこきて
上と下との地名別和ふ。を二つるべ。ふるハあ〳〵び。上るふハ廣くして。下るを

○玉のをロ

手本にある地名し。絵る糸ぐ
はゝハ絵がとし。葛城の内ニ行ゝる石山し○指き十二ゝ月ゝきや 糸やハ久米の指つ
ゝり三ゝこきハ糸やハとゝ山田をへゞゝ。文美へゝきり。絵づゝ

まゝ

月 ゝのふ坂 や　いせの海 や　ゝなぶ ゝ ゝ や　なぶ ゝ ゝ や

かゝくのゝひて下へ地名をまゞるもつゝ乃ゝをゝり

まゝ

ゝあき 鳴 や　やまゝ　ゝあゝ ゝ ゝる や 雑 鳴　神風 や い 勢

ゝゝぬゞひゝ。上ハ枝 絵 ゝて下ハ地名し。古風ゝゝとゝゝさゝひゝゞゝ。ゝかゝゝゝあゝゝゝゝゝゞゝゝかゝゝゝ

どゝあり。但ゝゝゝゝゝ

後拾一　春慶さくら　や　おそき。山川乃いさゝ波をくだ[illegible]

けやハ[illegible]ひのやうに。[illegible]衣を[illegible]がおそきとし[illegible]ゝ[illegible]
やうに。いつ[illegible]ゝ[illegible]や[illegible]をまつ[illegible]
やの[illegible]ひよきといひて[illegible]
せてハ[illegible]ひを[illegible]

○拾二つの間ふそさむや。

風十七　芳系雅規　なのめと[illegible]く花　や　紅紫をゝる[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゑんせあ　ぞや　やゝあ　ぞや　いるあ　ぞや

かくのおゝゝあを上るもおろゝと。但ゝゝトに係る者と。上りおくあとハ日ゝゝゝ。そのゝゝゝゝひハみの老あの終りゝくゝいり

右係ゝ雑のやあるとゝいづもも切ゝ有ふトの結びまかゝりゝゝ

加

○もべてかをやゝ似ゝる辞ゝて。やと無りゝいひてよく似ゝもあり。有ふ

茅蜩ハやゝゝいふべき有を加といつるもおりゝ。されどゝゝゝゝ

拾又　いつのまふ紅葉しゆるんゝ山げらゝきのふ［ら］和のちる氏こし

月十七　世を世をむくそろゝ［ら］きく［ら］おく山ハ和ひろひまそ入るかりきる

右の歌のかも。結ひハやの格よ月ゝそ。やまハ西ゝ。かりゝを中ん［ら］と譯して

まゝ

拾十一　命をバあふかふと［ら］きゝ〳〵かゝわきやた名〳〵に和そぬ志ふせん

後拾十　ゆふ〻ふ［ら］ありとゆふるみゆる人ゝ〳〵名結ゆくまいの江

月十九　みゆきと［ら］よふハふゝせて今ハゝめゝ出ゝ名の橋ちゝ氏ゝりゆる

ちゝゝのかも。［ら］んのゝとゝるゝハ止ゝ月ゝそ。結びをたゝふ結ゝび

○切ゝ〳〵加　後のゝゝ名にかゝ〳〵かゝり

古十又　夕さ死む人なきゝこをゝちゝゝひゝぎゝんさめとゝゆゝるゝ氏ゝ［ら］

月十七　ゝ月ゝがゝうへゝり高ゝ出ゝかゝくゝゝる去の川ゝゝゝる私乃ゝいの志づく［ら］

月十八　安中はむゝゝよゝやゝゝうかゝりゝん月ゝが外ゝ山ゝつのゝゝふゝゆゝる［ら］

後十七　月ゝがゝた名ふゝを氏ゝかゝくゝゝるゝゝゝゝ考ゝ氏人のゝふゝりゝときゝハまゝゝ［ら］

格十七　ゝゝ氏ゝゝとふやゝどゝゝる月ゝ氏のゝゝゝ名ゝハなゝゝゝゝて人乃孫ゝよゝゝれゝ。［ら］

古又　秋の月ゝゝべさやゝふゝてゝゝせゝるゝゝたゝゝ紅葉の敷をゝゝよゝ。［ら］

月　かゝゝゝる西ゝゝ［ら］あゝゝる和ゝゝちゝれゝわに出ゝねハゝゝを今ゝゝゝに行きゝゝてゝゝゝ。

万葉よハゝゝん。ゝゝゝゝ

法花四　明ぬる　□　川瀬の音はけしくなりまさりぬれかと人のおそれの心あるは

詩右　紅ぬる　□　新ぶふ　□　しだれふべきをかくしのあハみくさのふりて

又詩左のてゝハ句はまことかるるかるゝ花やうるゝものかな

詩又　きりぎくを秋をうゑ秋のあるまゝによる　□　野のそゝぎりゆゝ

同　ひきぶのやゝ瀬乃波のしゐをぬくぐを　□　人の袖乃秋ぎり

同云　くれをゆく雲のあををあらしの　□　まさきのかづらきの山

同十七　紅葉ぬぐ　□　初をゝばらに神ふたぐを結まゝ

此ぬぐハ詞を下上りうちへ　いゝ　花やし

又

同十八　ゆ色　□　とよ　□　ん　面彩も紅葉ぬまをぬぐうつるゝ

此　□　かゝ　□　切　□　かるゝを下へよりとゝ辞を法ゝ

まゝ

同四　月をあはまんりの　□　むく面ぬれゆくをの赤ぬさを人

こゝハ　□　とゝふこゝふこゝ　□　ぬまんりこゝとゝ

まゝ

同八　いせ物　ゝ　玉　□　ふぞと人乃ゝひ　□　ぬゝとへてきゝまゝ　□　ぬを

かくゝとよゝゝ

きべて後のゝぢめにおきて切ゝ　□　加の上をつゝ　□　格の辞よりゝある定まりこ。

又やの終ふいつれゝ　□　切ゝ　□　やの上ハ切ゝ　□　格の辞ゝりゝある定まりこ。こゝや

とかゝの格乃ゝりをこ。一二例をいたゞ　□　切ゝ　□　やハ　□　ゝりやゝ　□　やゝといひ。

かをゝ　□　ハ　□　ゝ　□　ゝ　□　ゝ

後拾三 きりたやなぎのかこ山乃郭公
金八 ほのぼのとなれるん世こそ思ふ出よ永ゆゑいのち惜しく人[ろ]と。
古一 みよしの世ゝ山べり咲ちる雲[ろ]とのこぞ花やまれる
同三 夜乃秋ふきと[ろ]とられバほそきなゝ一ゝふわるものゝえ
同云 浦ちかくゆりくる雲はうゝゝ世ゝ乃まゝ山ちを[ろ]とぞみる
同十四 玉ぼこ世そをつゆふもまどハるん人をうふ心永[ろ]と思ふん
右の哥ハ加[□]そ望ゝゝを[□]とあそ下へ侍きるし
○加[□]を重ねる格
古三 うぶの夜ふにふゞゝてふらぎをそを[ろ]ぬ[ろ]ぬ[ろ]ぬ
同十八 よの中を美[ろ]うつゝ[ろ]うつゝとゆゑ世ゝ[ろ]ぶをてなるきだ

後拾三 ほのぼのとをうゝ世ゝ世ゝ[ろ]ふのある[ろ]なき[ろ]ふを[ろ]ふをるゝ[ろ]ふんバ
拾七 はの玉世ゝ[ろ]ふをわゝゝにつゝる田そ世ゝ[ろ]をへ[ろ]とえそえをかる
同十八 いきゝる[ろ]志ゆる[ろ]いふおりゝしぞ[ろ]ゝ[ろ]ふるゝ玉ゝゝ[ろ]き邦
社十七 ほゞよをバゝふ[ろ]あを[ろ]とまゝゝひの後乃世いづきたゝきん
同十八 れゝふべきほゞ後の世を世ゝ[ろ]なき[ろ]ゝ[ろ]ゝれだこそハ世ゝ世ゝハを世
こゝゝハ二つまるゝ。つゆのゝゝ
又三つも
古又 秋ゆゝ世ふきあをにゝゝそゝ世ゝ菓ハ美[ろ]あゝね[ろ]波のゝゝ[ろ]
新十七 そゝゝ乗の星[ろ]世の色のほゝ[ろ]。わゞをゝゝ[ろ]ゝ世ゝあゆのたく玉[ろ]
万十二 うつゝ[ろ]妹ゞきをゝる美[ろ]を。ゝれ[ろ]まどへる[□]恋のゝゞ世ゝ
世美楽の哥ゝゝ八中の加[□]を切ゝ[□]加[□]そ[□]の侍ゝる。上下ゝゝ二つハ下へ侍ゝ[□]
又世つた

○玉のを四

古十三 ゑやうゝゝ春やゆきあんおとしさを美 り うつ り 祢て り さめ り

新勅十八 おりゝゝゝ美 り うつ り ゝゝゝゝて ゝる り なき り ゝゝぎゝゝを

けゝゝハ二つゝ二つまゝれり

○かたのゝこのか

後拾八 はゝひなゝゝばあとでゝつゝとゝるぎかゝゝを結いゝゝと り 人乃はぎゝ法

けかゝゝ徒のゝゝぞゝふ生てゝトへつゝゝくかゝゝてゝくゝゝのゝこゝ

世トハみゝのゝかゝゝ

古十七 おいぬゝゝてゝなゝどゝゝ春冬をせゝきゝんおいゝゝゝゝ

後二　[illegible]

月古　[illegible]

千三　[illegible]

月十　[illegible]

○かのをのかを

千三　[illegible]

新勅八　[illegible]

古十　[illegible]

月十八　[illegible]

[illegible]

[illegible]

月十六　天雲社よりなかふも人のちをゆく　り　さきがふめるハるゝ池うら

月十六　うらつきふさびゝうらとを　り　りみぢ染もゆゝふき花ハ冬ゆうりるを

月十七　ぬきみだるゝ人こそ有しまつ〳〵むのきれくもちる　り　社のせゞきに

金三　り人をまつゆく　り　生べの宮ぞれちうひをこに猿麻せよそや

新四　さゝひう絲さこをハ麻ゐんきぎかゝめやどる　り　月の独ねせゞ花ゐ

○かゝを　□　こをハを□ハ麻ゐる緯ゐてゞかといふこと

古二　今を　り　咲ゐゐゐゐゐんゝゐちだゐゐゐゐ麻の麻乃山ゐ社の花

拾十三五　乃〳〵引乃山ゐ社尾のちゞりをのゐゝ　ゐきゐゐ　ゐとゐり　り　絲ん

ちゝこ武社のかを□ハ麻の宮に生て下人侍ゞりを○社漬ちゞゐ　ゐのゝやゐ□ゐゐゐ

えんをのゝえ社ゐ社ゐ　ゐ山の宮ゐりゐゞ染。ゐをハやゝ□かゝをゐゐり　ゐゞゝも

古二　宮がすゝいろ社ゐ麻ふゐしつるハたゐゞく山の花ゐりを　り

月九　天のゐゝゆりさみけえをハ妻日ゐる沸笠の山ゝ出〳〵月　り

月十三　ゐゝ〳〵げ乃をゞ宮ゐ麻ゐくゐゝちぬべゝ乗ゐくゐゝを人えきん　り

拾十二　ゐゐ月出をゐおりゐ人のゝゝろ　り　麻ゐゐをゐゝゐんゐ

月十三　秋の乗社月　り　宮ゐ　宮ゐゐ麻ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

山しゞびハゐゐ切ゝ　□　かゝも

ゝゝ

長七　秋乃乗ゐ月　り　ゐきて侍るし　わが思ふ人のちゝつてやゐ

ゐゐゐ　□　ハ下へゞゝゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ狂ゐゝゐ。ゐ在ゐゐゐゐゐゐ□ゐゐ

ハやゝ月ゐゐゐゐ。ゐの白ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

ゐゝゞゐゐゝゞれゐゐ。○風雅ゐゐ今ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

詞ゐ今ゐゐハゞゐ今ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

の宮ゐ今ゐゐかゐ咲ゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

ゐゐ。ゐて今ゐゐかゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

○かゐゐゐゐの　□　□

○ゐのを四

古十七　[illegible]

日二十　[illegible]八度たきどうれきを掛　紫乃立ちゆ[illegible]紅葉のきゆ　[illegible]

山りを多紫にいと多り。もべてゆ紫六ゆ[illegible]ハうゝて。みゆゝと
のゝいつり。[illegible]きゝ紫ゆゝに[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

○[illegible]

古六　山科[illegible]おゝゝの山乃きゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

万古
[illegible]　[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

山科万紫十四の紫ゝゝと二つ三つ有ゝ[illegible]ゝ序の文ゆ今をこひざゝめゝと[illegible]

○[illegible]

古七　[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

日十六　[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

拾二　山ざとに[illegible]ゝ人をゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

古十　[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

[illegible]ふとゝやゝ[illegible]る神名分外多載十三新古ゝ十八をぐふもゝ

○何名はゝ下ふおゝくかゝゝ　次の何の結ゝ出せり

○ゝゝゝゝゝゝゝゝ　六の巻かゝゝ結ゝ出せる

○ゝゝゝゝゝゝゝゝ　五の巻ゝゝ結に書せる

○ゝゝゝゝゝゝゝゝ　三の巻ゝの部に出せる

○ゝゝゝゝゝゝゝゝ　あゝゝ巻との終に出せり

何

○なゝふ　なゝど　なゝぞ　なゝ純　なゝるゞ　いゝふ　いゝゞ　いゝぞ　いゝづゝ

いゝ

伴の歌皆てふをそれ結びの格用ゆゝきなふ一つふ合せて何の部とせ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ

しとこかの人のゝゝゝん。ゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

金吾　いこの　そらゝ神もらめとみるさ山二紫は世乃ちよはゝ紅を

月八　うふとてふ名を言語ゝ笛きど　いづゝ　ハちゝふらる年はさ中

同八　いくゝ　ゝり侍しと人をみ名せのゝゝ色ゝ変ゝ色ゝかゝん

秀四　たき　をゝを半りちは心乃女子も秋と紫き人ぞゝゝし

月　大ゝゝ秋の神ざ色は春きゝバまゝ　たゞ　紅ふゝり四の月

月六　月ぞもむ　たき　ゝハちゝにきの山や吹上のふ色ゝとりなゝし

月十　いづく　ふゝとよひを宮をかりゝゝを色もゆふ菅は世の行しふ

月十六　なきゝゝて見ゝハ色ゝゝは春ぞゝゝと　など　ゝゝ川の花は下陰

月十八　いふゝゝて今半ぞよふハあり四のつきせぬ面をいゝふゝゝを

月二十　おゝふきゝ色ゝと　いつ　ゝいき侍は松まゝゝん面をむばゝゝに

万九　濃のゝへ乃は紅の山ゆ秋はべゝきき濃るえ　たき　ふぶこる

○金紫三　いゝゝへのきふそ　ふそのきゝ濃ゝひ出て言津乃美ゝ月はきもゝん。これハ

雑後をやぐそなふてふ辞よひゝげゝゝ一の格し

○切ゝ何　濃のゝぢえにあり

後十三　れりふてふゝゝを　いふ　ゝつゝゝ。後ゝ紅面と思ひぞとゞ邪

後十八　いきしゝるゝ志ゆるゝ。　いふ　おりゝゝぞ。ゝよりかゝるゝゝげゝる

源氏作伝　いでや　あぞ　教ゝゝぬゝ分ふるハぬゝ人ふまゝぐは心ちゝる

又下に加かそを添て切るもゝり

後十二　よつゝゝは人のゝゝゝ紅まぐゝねバ　ゝふ　ゝけ度をぬべき面をを

拾十又　ゝゝゝるゝゝ志あぞ　あふ　ゝ　ゝゝ　ゝちもゝゝゝばあまいきゝゝひる紅面ゝふゝハ

○志のかふいづゝゝとゝひて切ゝおりゝ。ゝきハ下ゝるいづゝの條ゝ別ふ

いせゝと。又や何と上よやゝぐゝわるハ。宮の美やの治よおせり。

○あのを口

○伺をとをやる格

後十八　[illegible]や[いふ]風の[illegible]ゆふもいまはものやかなしき

落八　よのあうぶいうくいひくのをそくハ[いふ]や[いふ]ゐんとちゐん

文本雜立　此五をも後をも[いふ][いふ]せんりえんりぶりもむさぶく北つ

うまくハしぶにをもようるうり

まく

後十八　ゐにこぐ行つかるとふゆゆよさしふて[たき]を[たき]とうゐハをえん

拾二十　おりひしゐ人も有る弓中城[いつ]を[いつ]をてるをゐくゐん

千三　とゆ玄どの弓をちぢ的ふふく姫を[たゆ]墨よりと[たき]ゐゆむん

同廿四　[たゆ]ゐゆふ[いふ]うてバうかうとちちびハ女教ゐ結ゐむる

新八　[いつ]ゐゆき[いつ]ふふべきたと助きバ後のようで人いをゆゆハ

同十六　[いふ]をて[いふ]世五りゆりへだうをゆゆ金ねをおりてさゐへき

後後五　[ゐふ]をを[いふ]ふふとゐゆ

乎

万四　をれくふ人をゆひえて[いう]ゐゐん[いづき]の日ふゐゐよをふえん

又ね對へてをゆをとゆりゆ

後二十　在ゆりゐ弓をを[いづり]ををを[いづき]の立ゆををををいををゆ

拾九　をりかゐに[いつき]をををきを[いゆ]ゆきよめん時ゐゐぬ者を

後拾八　[いり]だりゐをゆりて教くりん[いく]をぬををゐぬゐゐ北を

○慶田社方分ゐ[illegible]をの[illegible]ゐん老本に[illegible]ハ[illegible]ゆく[illegible]べき

後集で判ゆいく[illegible]をゐ[illegible]ゆりゐ[illegible]ゆ[illegible]ハゐゐ

ゐ[illegible]。又風雅二[illegible]ゆきみゐ乃ゆくゆゐゐゐゐゐゐゐゐ

日ナ七[illegible]ゆきしんいつのゆゆべゐたきゐゐんゐふ人ゐゐのゐぬの在。をき

らをいゐゐくゐゐゐ。をべてみど

ふハをなべきをふゐゐゐど。

○□とゝあら橋　けた橋　はしのかけかた

古二　ぬきつぎをちひてをりつる事は四ホ長ハ[いく]をつゝしと思へど

月十三　うぞ玉ぢやうつはさぐらるる美ホ[いろう]をまさゝぐり屋

月十八　[いく]よりをつゝじ新芽をぞもかくつるぢうとホ思ひみぢゝ

長一　まれホうゝ人しゝ初りまば長の世ぢとうおも[ゆふ]をひかり屋

月云　[いつ]ぞを月ゝぬ秋きなれりのをかてこようひのそづしき式

ね二　□ホをちきハちゝめど新屋戸のやまを初みたまふゝせゝ

長四　ちびしゝまふ面ど世立出てなづむをハ[いづく]を同じ秋乃夕雲

月八　[たま]がよをまゞ号をちゝぬよの中にまれ不どいづくうゝんとまゝん

月十六　月ゝまぼば[たま]をんぞなぐさまぬ横橋　山乃ぬりをうゝねど

月　[いつ]よりをりなれよの月あきバ月ゝ人さへか人ゝ入れ新

ね十五　□をきゝ初ゝや人乃おりゝんおぬ夕ぐをけまれ世の秋

月　ちゝ新こしゝ[たゞ]いつちをまぐちゝでまをせゝはの屋世立屋

件のちぐとのごゝくをゝ□

○うぞをとのをハ別ちり

橋九　大ゝ新秋ゝ世ちよせゝかど花ゝ月れて[いづく]ゝをとおゝ□

月七　わゞちひゝ世ゝみゝまるゐゝげ[いろふ]きれぐをとうふゝぐぞおき□

ね七　ようれてをちゝうへゝげれを袴衣[いく]へゝ新る山橋ちりゝをと

右のわくゝをとぐをとゝあるもに可ゞ

○□をゝあゝをきゝをりゞをき橋

古十　いま[いく]ゝをゝしなりまバ花をゝ世ぬをゝおりべゝなを

後拾十二

月七

詞書一

凡十数首

たく山乃さくらの花の盛なるを見て

さがたえ[illegible]ゆきき人をしばかきあつ[illegible]

むかしのそとをゆくて乃ちる花をたが里ふる梅の花ぞそ[illegible]

人しれぬ[illegible]

[illegible]

○一つの何

此格詞びとかくりぬ

古古

みちをくの[illegible]

月

はのおもて

月二十

みちのくハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月八

月十七

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古十五 いひひろめば恵てそ世にしられみを世川 [なふ] 水ほとり 見ひそめきん

屋九 あふしく行かしく来ぞ〜とは去りぞ〜むけをぞ〜り [なふ] 水ほとり 見きん

こゝハ水を掬ふ又なふたとへんぞ〜よ〜ぞひのあるを先とハ別し

○なふせん水

古十六 いひまぞ行かしく人も来を [なふ] せん水ぞてもんのなぐさあるゝ〜に

屋十六 [なふ] せん水へくのみ〜先をかりひきんおきろ〜むを原をかづく〜月は〜て

こゝハせんあるいふ〜を帰り。さて先〜ふ〜ハ切を。屋撰ふ〜ハ切をぞ〜ひ

ぶいまゝ〜ふ〜し。

○なふせん

拾十一 ふひもふん屋七 [なふ] せん山ふ〜月行ふ〜を人を〜ふまく〜ふ〜月を

こゝハせんとふひて水ほとり〜ふ〜

○なふ〜水

新撰十一 ふ〜ぞ川〜せぎりにむ〜ぞふの体乃ふを [なふ] 〜に思ひそめきん

花系風方

六ろ表 わをとぞ行者ふりはをいり坂の宮城 [なふ] 〜ふいそぎあへきん

○なふ〜

古拾 [なふ] 〜 ふ屋撰七 〜 巣いろそ先ふ〜〜ふ〜ん花りてくやを考もこゝろ〜ふ

風二 白川御 ふふく〜たづふ水ハあでは〜ふ [なふ] 〜ふ〜ろをたゞふ〜ふ〜ん

○なふと

新後二 西行 [なふ] とかく〜ひどふ〜ふ乃ふを〜をふ〜ぬく〜たりひそめきん

新撰古十 後鳥羽院 下野 ゆきふまて一夜ふどゆる拉ぞ振り [なふ] と巣持ふ〜ふ〜ふ〜ん

○なふとて

後十一　夏はぎとそうれきあるうきと　なふ　そて人よりつもしそんつん

拾川　そうれ〜やまがよとのうちくきふ　なふ　そて年のうきをへそぐぞ

○なふそ

新古　うれ人乃月も　なふ　そのゆうとぞとおりむなぐもうちながそんつ

けそハ色づし。狂三の歌　その紅いくそうくいつう

○参聚ハ　なふ　そとうといつうこと　ハ　なふ　ハれぞたあう。これ〜去そ後ハ　ハ　なふ

○一つの格

金又　書濱乃まうぞ　なふ　ありぞ　ぞきせぞ　ハ　ハ　ぞ　ぞ　ぞ

後拾十 なぞ てかくまぎらるんかくぞうのどうふを考る月もけう世ふ

千三 なぞ てうくおりひそめきん郭ゝ吉はみゆ方の法乃古忘うは

いせ物 なぞ てかくゝけうぶかくこふきりにきんありしさどともむきびゝ和を

とき〳〵てを添ゝり

又てかえしくいるハ

後拾二 みちよへゝなりける和を なぞ てうはゝ〳〵もとゝ忘づをそめ傳ん

○なぞや 什毫やの紙ふ出せり

たのかさと所ゝとなす

● なぞ

○下ふかりをかゝ例ゝ

○なぞを

古十一 かゞ足ゝへゝ下ゝぬ忍ひの なぞ をかく後のふふ紙そめゝん

金七 なぞ をかくこひちふたらてはやそ事あまり出くもみ月ゝゝん

新後撰一 後さがの院 みな人乃家路ゝ足ゝこゝ忘ふかり なぞ ゝをかる吉はゝるがも

なぞゝをハ考ゝ

○なぞや 此毫やの紙ゝ出せる

○なぞと あの毫とのふふ出せ

たのかさとあるさいとふ紙ゝ

● きれ しぬぐ

○一つの指

古十七　まちあくのものふりぢぞと　たき　ゆゑふみぢもんとゐふあるこゝろ。

後四　まゝ人を　たき　ゐるなくに公おりひの外になりばうかゝん

拾十一　ものぶかも　たき　ゆゑゐるゝね拾なれど今ハゐふゝは考へゞてん

古四　たゞ　秋ゝ　ゐるゝぬるのゆゑ女命ゆゑ考る出るくまゞにうつゝふ

同十二　ちひゐるば　たゞ　ゐをたゞ云中はつゆゑき拾いひハなをゝと

後十二　ちゝひてを指おりゐよをまきふゐると　たゞ　とめをゝに今ゐるゝゆゑ

万七　ゐるゝをゝをあきやゝき常　たゞ　ゝあふゐ考もがとわが思をゐるくに

同　みゐぞに拾づくゐるゝ玉　たゞ　ゆゑふ公つゝてゆゑがをゝをゐるゝ

同十一　たゝゝてゐる雖彼蓑笠おきゆゝゝ後を　たゞ　きん笠ゐゝゐるゝゐ

同十二　里人をかゝゐゐ法ぐがゆゐよゝゐゐやゝゝをゝをゐるん　たゞ　ゐるゐゐ

蓑笠ゐハ指おゐゝ。此指を上ゐ出せゐ拾ゐたみちのくハいづくハあきどゐくゐ

どのあゝゐぐゝをあきゐゐゝ。ゐゐゝゐがゝいゐゐハ中ゐゐ考きゐふ別ゐゐて

ゐに出せゐ。ゐゐゐハかゝこにいゐゐぐゝ。他の人をゝてたゐたゞゐふし。

此外ゐゐゐゐゐゐゐ

●いゐふ

○いゐゐゐ　いゐゐゐ　いゐゐゐし　いゐゐれどいゐゐんゐどいふ

いゐゐゐんふ切ゐゐゐと切きゐゐゐゐゐゐゐ

新古　涼みどりゐゐゐゐひゐて　いゐゐんゐ　きゐく時ゐ拾ゐる乃拾　拾

とゐハ切ゐゐ

切きゐ下へゐぐくハ

古十八　いゐゐんゐ　いゐゐの中にをまばかゐ考拾ゐるゐ笑しゐゐんゐ。

○ゐのをゐ

○孫ぐふまのいふして　俗俗よるぶそそとつふまし

後十　ゑとりのこ号ふまらら　いふしてを　れおじ　ゆう人をゝへん

同十三　いふして　かく号ふてふまとぐふ人ばてあゝで　ゑふかうん

同十四　いふして　ふとうううんほゝぎすなぐきちの下にあきばうひあ

　　格けまるハいそといてふまえ　下のいそのゝ條ゝ出せり

○いうふきや　けまもやの紀きやの條ゝ出せり

　　ふの乃ふとあるまとあし

●いうぐ

○下にかりぐ　ゆれたく　俗形

○いうぐを

格十九　ようちあらは　いうぐ　をせきゝ　ちびゆのまゝ乃杉のまゝ　ぶほし

別十二　ものかりふくいまねぐうハあぶうと　いうぐ　をきべき　紙ちづくを

　　かくのかく下にをを俗てをいとり

　　けかことあるゝ

●いうぐ

○下にかをおくる。いうぐういうぐかをとづきてあるのゝまを。何をべゝあゝ例ハあ

○孫ぐふまのいうぐ　俗ふまふぐをとふまし　けを結びよかりゝぐ

後十五　いうぐ　うちを手きりもせぬゝゆゆとがあをてゝる家ハゝをてゝるべく

同十九　いうで　あをかさゞり山うり身をかして袋ゆきゝ袋ゆそうんとぞ号ふ

拾六　生うりゆくゝバいうで　みやこへ告やうんうふ白川乃実ゝ古えぬゆゝ

同十一　恋くいへゞ同じ名ゆふてそ号ふうり名いうで　恋ゆゝ人ゝ古うせん

同十三　美をゞふいうで　かゝうんふんてゝゞゆゝのをでゆるゝよのあぐさめふせん

同十七　いうで　あをゆゝゆゝじろ結ゆをふゝうん事ふゝうりてゝ恋ゆゝとハぬゝ

新勅十公忠　みる人のいうで　とゝりふゝうゞゆよゝうゞゆよあた名ゝゝと名をいのゝうゝふ武

又加を添ていうもあり

拾十一　いうで　ゝとおりふゝうゝ結あゝうきハおゞめくさへぞうゆゝりゝる

又色を添ゝゝハ

支木いせ　いうで　色ゝとゝふんを添ゝかゆ結井ゝゝを拾ゞ添さゝゝゝゝる

又二つ重ゝゝハ

拾十八　いうで　いうで　ゝゝる山をなゝさめて後乃妻までゝゝ袖をおゝゝゞ

右のかゝゝとゝゝゝゝなゝ

●いづゝ

□

○いづゝ　□　いづゝいづゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○いづゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○えへう〜いづくハ皆切〜掛こて下へつゞく例なり〜 後ハ〜ゆくゑもいとゆゆ
も三ゐ切〜なり

古十七 むぐめきけかゞやや。いづくこゝろきの後乃流るをおきふ出ふりと

後十八 ぬるたかこに元き。いづくとくまちとゞいつとの元けに長くいそはし

いせ物語 いゑ〜へ乃あちひき。いづくはらくひこきるかゝるも後ふりるる和

古十八 よの中ゝ いづくなるのきてゝ〜ゐたれやいとんあるゝやいそん

新十八 いをづくはてゝさねよひもをゝりを いづくかのふれしうぎろゝ

狭衣 きの色〜。いづくそれくの拙やこれ。人ものめ形る所ふそ有られ

又下へもを添てもゝり

古十九 むつごとをまぐつきゝふ的ぬ色を いづくを紙のせ〜てふよハ

後十 ゝをかくをいつふ元けに紫のゝしぬゝる いづくを春のかゝをどゝろハ

金八 いつふゝてゝ山ゐゝる拾ゝきゆまと いづくをにゝ古〜にゝゝ女の星

古の外古く拾ゝゝ形ゝ

●いつ

○いつ〜かゝをハいつふ〜をゝさ色ゝ拾ゝ。〜ハやをめ静ゐ

をバりくハをゝ。紙をゝを後ゝをハ。いつ〜ゝくいへゝ。別ふ一つの元けゝくゝれ

後一 松をゝをきわゝゐもつまゝびゝりゐ紙 いつ〜ゝ さゝゝゝやゝちゝゐん

拾十九 いつ〜ゝをゝ拾くまけまゝゝ〜せをんつをき人乃なゝの数ゝん

古四 ゝふゝをは今ゝん身ゝけきの山をゝ いつ〜ゝとのゝまち海ゝべき。

後八 いつ〜ゝと山の拾ゝ〜をゝ身けをゝふまをまゝ〜ん

同九　いつしらと。わがまゝ山ふかくハ入て古ぬるゝ法ゝ[illegible]ゝ独ゝ[illegible]

拾二　いつしらと。ゝまつまゝ大[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

同二十　いつしらと。[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

件の[illegible]ゝとのいつしらハ。[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

拾九　いつしらと。[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

六帖　いつしらと。[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

こゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

と[illegible]ゝ[illegible]

金一　いつしらと。[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

同　いつしらと。[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

千十　[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

同十三　[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

新十八　[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]

紫式部

赤染衛門集　いつしらと。[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

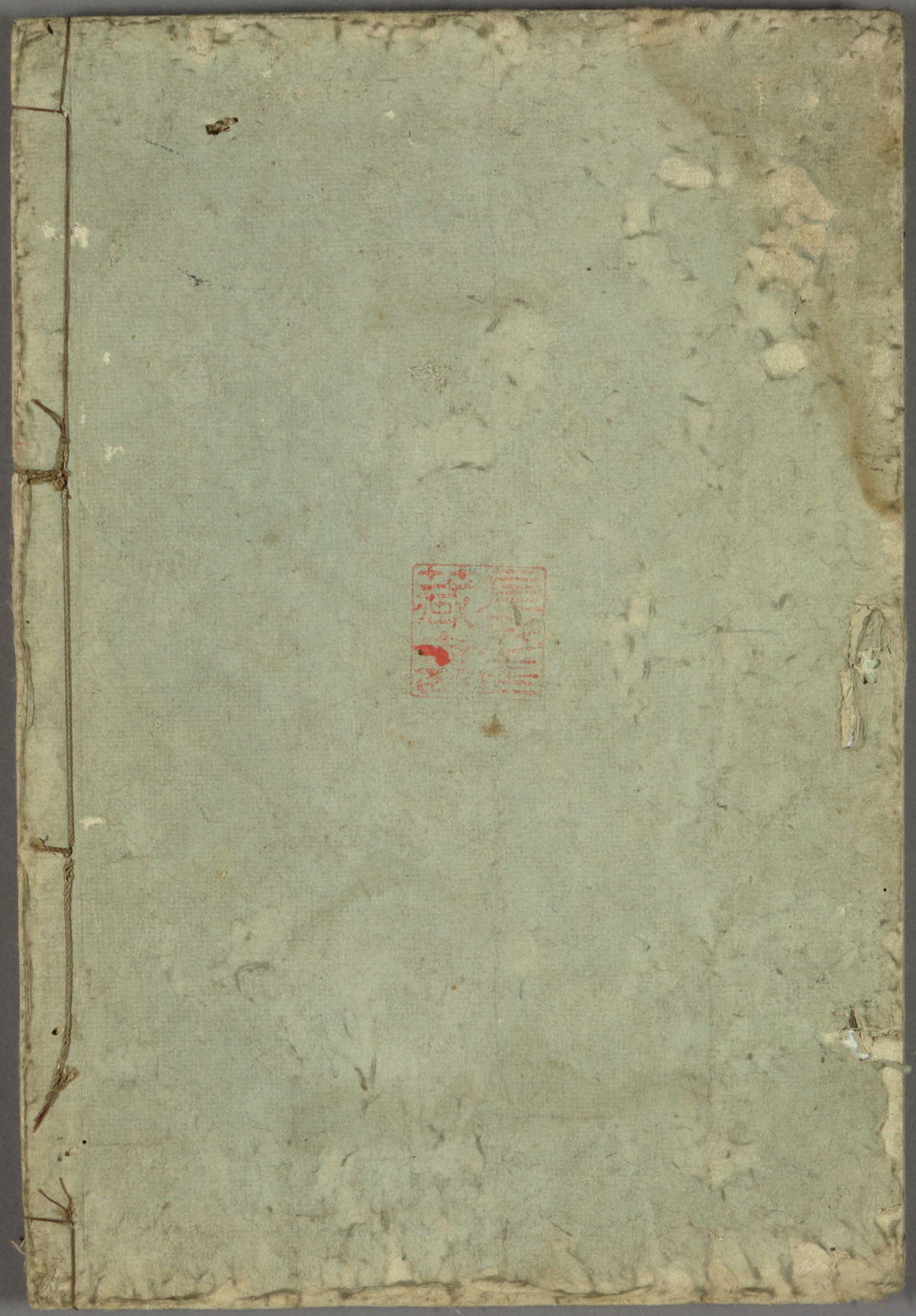
○いくゝ

○いくゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

○[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

○[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

○[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

○[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

いひて。こゝで多きこと久しきことゝ仏教ゝすゝ。いくハ数ひの辞
多きバ。こゝでいくゝ代ぞゝのゝいひてハいくゝ代ぞとゝ代の数を問ふこゝぞし。
いくゝ代とといへゞ。とゝて久しきことゝふゝるし。さゝへバいくゝ代あゝへ。家の
老といひてハいくゝの辞ゝあゝ。いくゝ代ゝ老しあゝへゝいへゞよろしきし。ゝゝべ
てけきゞ老をよゝゝゝ見せゝへてけりゝべき辞あり。千載三ゝゝちゝゝりあゝるたきゝあゝ
玉葉古和歌集ゝ法ゝもゞゝゝとゝゝゝ